

2022年度活動テーマ(案)「つくと食べるでつながろう ～私たちの地産地消～」

「入管問題」を知っていただくこと。 それが本当に大切な事。

～歴史講座の都留先生から、映画「牛久」上映にあたってのメッセージ～

大型のシネマコンプレックスMOVIXつくばでの映画『牛久』の上映。映画の題材からして“異例”のことだそうです。実現できたのも皆様のおかげです。日頃からの、人権問題に対する、地域の方々のアンテナの高さがあったからこそ。また、常総生協には感謝です。供給で2週にわたり、計7000枚のチラシを配布してくださいました。初日客席いっぱいの人でした。

その後、私はレイトショーに2回行きましたが、他の方から「みんなで必ず行くようにしているのよ」と声をかけていただきました。見知らぬご家族から「埼玉から来ました」と声をかけられました。皆様のおかげで、シネコンでは異例の1週間延長となりました。常総生協がチラシを届けてくださったことの意義は本当に大きいです。たとえ劇場に来られなくとも、チラシをみてくだされば、こんな施設が地元にあるんだ。そう思っていたいただければ。

この問題にとって、知っていただくこと。それが本当に大切な事なのだと思います。常総生協に感謝です。

面会ボランティアをして感じてきたこと

「人から見えないうところ」、「弱い立場の人がどんな目に遭っているか」。そこにこそ日本の本当の姿があると思ってきました。でも、その日本の本当の姿はあまりにもむごいものです。面会室で倒れた人に、駆け寄ることもできない。名古屋入管でウィシュマさんは閉じ込められた空間のなかで、必死で職員に助けを求めました。ただ医者に連れて行ってほしいという願いでした。誰も動きませんでした。24時間、人の目のあるなかで、監視カメラが見つめる中で、亡くなりました。牛久入管でも同様なことがおきてきました。法務省が認めた死亡事案は2007年以降17人。うち牛久入管6人。3人は自殺です。2010年2月20代ブラジル人男性自殺。2010年4月40代韓国人男性自殺。2014年3月30代イラン人男性が低酸素性脳症。2014年40代カメルーン人男性が病死。2017年3月40代ベトナム人男性くも膜下出血。2018年4月に自殺したインド人男性の方のこと。仮放免がだめになった後、失意の様子。何人もの方からその時の話を聞きました。

どんなに体調に異変があっても、病院に連れて行ってもらえない。自分がどうなってしまうのか、その恐怖を訴える電話の声。忘れることができません。外の病院に連れて行ってもらえたら一安心なのか。そうではありません。犯罪者のように、拘束着を着用させられます。

絶望の収容所だと思います。映画は世界14カ国で上映されました。「隠し撮り」を問う声は日本のみですが、トーマスは言います。アメリカでは自分の両親が若い頃は、公然と黒人への差別がまかり通っていた。そのルールをどう考えるか。

難民・入管問題に対して いま私たちにできること

発信

SNSで感想や 意見を発信する

難民・入管問題についてSNS等で発信することで関心を持つ人が増え、社会的な動きを作り出すことにつながります。



◀『牛久』
公式Twitter
アカウント

知る

イベントや 勉強会に参加する

難民・入管問題に関するイベントや講演会に参加することで、より問題について理解を深めることができます。



◀難民・
入管問題に
関する
イベント一覧

私たちに
できること

投票に行き 意思表示をする

各政党ごとに難民保護や入管収容に関するマニフェストが異なります。投票で意志表示をすることで、制度が変わるきっかけにつながります。



◀各政党の
マニフェ
スト
NPO法人難民
支援協会
(2021.10.19)

投票

支援団体に 寄付する

日本に逃れてきた難民を支援している団体に寄付をすることで、活動の継続や支援できる難民を増やすことに繋がります。



◀難民問題
に取り組む
団体一覧

寄付

すでに幾人も人が亡くなっている。法務省の施設で。これまでこの問題について、日本人に問われることはありませんでした。それだけに、収容されている方々に何か起きて、病氣と片付けられてしまうかもしれない。何もなかったことにされないよう、証拠を残さなくてはと思ったのが、撮影の始まりとこのことです。人の命をまたいでいくことはできないと思います。そもそも「法」とは、人の命を大切にするためにあるのではないのでしょうか。「法無省」であってはなりません。映画に登場した人々は、「日本人はこの問題、入管で何が起きているかを知らない」といいます。そして「日本人に知らせれば、『こんなことはあってはならない』と一緒に声を上げてくれる、力を合わせてくれる」と、彼らは考えています。私たち日本人を信頼してくれているのです。政治学者アイデン・ギュンドーは、入管収容の機能について、収容の目的は、自由剥奪だけでないといっています。個人を公共空間から隔離し、個人としての発言を不可能にすることこそ、入管の本質的機能だといっています。さて、政府はウクライナの人たちを「避難民」として受け入れるといっています。なぜ、難民条約を結んでいるのに「難民」といわず、わざわざ「避難民」という言葉を使うのでしょうか。「難民」という言葉を使いたくない理由はなんなのでしょうか。マスコミには何度も何度もしつこくしつこく聞いてもらいたいところです。

(都留孝子)

☆映画「牛久」を観た職員の感想☆

○隠し撮りという違反行為は罪か？

映画「牛久」を2月の終わりにつくばMOVIXでみたあと、「隠し撮り」について悶々と考えていました。そんな折、3/22夜TBSラジオに出演したトーマスアッシュ監督のお話を聞いて納得しました。ラジオパーソナリティーの質問に監督は、ボラティアとして牛久入管に通っているとき「私が“目撃者”なんですね。目の前にいる人が死んじゃうかもしれない」「その時、目撃者としての責任があると思うんですね」「例えば、道に誰か倒れているときに、見ないふりをしていなくなるんじゃないで、見た責任があると思う」。監督のアメリカのご両親の記憶には人種差別が合法だった時代があり、「それは法律だったんです。その法律は守るべきですか？それを守ることで加害者になるんです」「なので、確かに”（録音・撮影禁止の）ルール”を破ってしまったんですけども、どうしてそのルールが存在しているかということについては考えるべきだと思うんです」「入管は刑務所じゃないし、彼らは犯罪者でもない。彼らは不法滞在かもしれないけど人権・権利があって、語る自由があるはず。でももし取材として面会を申し込んだら、入管職員が終始立ち会って、発言は全部メモをとられるんです（取材者側も撮影・録音は禁止なのでメモのみ許可）。それでは彼らは自由に話せない。」「入管側が隠したいと思うことが無ければ、そのルールは必要ないはずなんです」。全くその通りだと思いました。

私は2020年の夏、「牛久入管訪問」（常総生協「歴史学習会」主催）に参加して、収容者の方と面会しました。私もその時、この刑務所のような面会室の「証拠を残さなくては」と衝動的に面会室の絵を書きました（ニュースレターに掲載いただきました）。でも絵や文章では、彼らの絶望的なまなざしや、10kg以上痩せたその変化は伝わりません。映画はそれをちゃんと記録し、私たちに目撃させ、「これでいいですか？」と投げかけてきます。

【「私の人生は無駄」】

映画の撮影期間は2019年冬から2020年夏まで。その間に入管から仮放免で外に出て「日本が好きだから、日本で働いて暮らしたい、仮放免中に逃げてしまう人もいるけど私は逃げない。悪いことはしていないから」と笑顔で語った若い男性がいます。彼は再収容されてハンガーストライキをやつれ、うつろな目で「私の人生は無駄」と言うシーンがあります。この言葉は一番ショックでした。何年もとらわれている施設での扱いと、外に出ても制約の中に置いて人間らしく生きることを許さない日本という国の不寛容が彼らの「人として生きる意思」を砕いている現実に、胸がヒリヒリと痛みました。

3/29NHKの「ニュースウォッチ9」には入管を辞めて以後、外から入管施設のあり方を変えようと活動している元職員が、「市民の関心、監視の目のもとでは入管側も好きなように処分することは許されない時代になったんだと気付いたんじゃないか」「市民の関心、監視の目が必要」と話していました。

私にできることは何だろう？映画をみた時、隣の席に仮放免中の男性が座っていました。（監督が舞台挨拶で出演者として彼を紹介して分かったのですが）。彼から話を聞いたり、生協でも映画「牛久」の上映ができたと思いました。（職員 木本）

○これが日本？そしてここが私の育った牛久に？と思うと・・・

当初「ちゃんとしていれば分かってもらえる」と話していた青年はいつまで収監されるのか定まらない中、面会するにつれ体も心も弱っていることが伝わってきます。「制圧！！」といいながら、収容されている人に馬乗りになる複数の入管職員、罪人でもないのに刑務所のように。絶望的な環境で弱り、不眠になると薬を与えて朦朧として自殺を図る人も。人権無視が当たり前の状況が伝わり、心が潰されたような衝撃を受けました。

これが日本？そしてここが私の育った牛久に？と思うと悲しく、腹立たしく、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。私自身、この施設で起きている問題を数年前に知りましたが、同様に知らない人が多いのではと思います。一人でも多くの方がこの問題を知り、関心をもち、注視してほしいです。まだ公開中です、ぜひ観てください！（商品部 稲垣）

歴史を学ぼう-未来のために

～新型コロナウイルス対策のお知らせとお願い～

平和の集いの講座においては、感染拡大状況に応じてオンラインを併用しております。
開催方法につきましては、常総生協本部までお問い合わせください。



主催；常総生活協同組合

日時；毎月第3土曜日 10時～12時00分

開催場所；組合員活動室

またはオンライン(ZOOM使用)

参加費；200円

※参加した際は、共同購入費と一緒に徴収します

お問い合わせ；常総生協本部

茨城県守谷市本町281

tel 0297-48-4911



生協本部に電話またはQRコードから申し込み↑↑↑

都合の良い時、どなたでも参加できます
お子様の参加も大歓迎！

2022年4月～7月の予定

※8月には、大人の社会見学で「戦争の加害展」を予定!!
詳細は、7月に改めてお知らせします。

2022年 4月16日(土) 10時～12時	「逃亡から市民運動まで、 私たちの歴史について」
2022年 5月21日(土) 10時～12時	「日本国憲法、70年の潮流、その時人々は～」
2022年 6月18日(土) 10時～12時	「日韓条約～知られる交渉の内幕」
2022年 7月16日(土) 10時～12時	「外国人と日本～映画『牛久』年表から」

※講座の進行により内容が変更になる場合がございます

※新型コロナの影響で日程が変更になる場合がございます

～講師：都留孝子先生（中・高校社会科非常勤講師）より～

大学で百姓一揆のゼミに所属したことをきっかけに、民衆史という分野があることを知りました。私自身は民衆が立ち上がらぬよう、為政者がどう貧民慰撫政策を行ったかをテーマにしました。英語が苦手な日本史を選んだのに、大学院修了後、アイルランド、イギリスの日本人学校高等部日本史教員に。毎朝の英語の打ち合わせは必死でした。帰国後は、主に公立・私立の中学・高校の非常勤講師。「今」の状況を作った歴史の積み重ねのひとつひとつはなんなのか。生活に追われるなかで、ひととき立ち止まり、考える場を作ってください常総生協に感謝しています。共著『学びあう女と男の日本史』（2001）ほか



コロナ・苦境だからこそ”助け合おう” フードバンク(食糧支援)をおこないました！



●フードバンクとは？

品質に問題がないにもかかわらず、市場で流通できなくなったり、家庭に眠る商品を色々な方や企業から集めて、生活困窮世帯に無料で届けるフードバンク活動。常総生協では、福島第一原発事故後の支援(2011年～)、茨城県常総市の水害(2015年)、岩手県岩泉市の水害(2016年)、熊本県の震災支援(2017年)の際に「フードバンクちば」と連携して物資の配布などに取り組んできました。今回は「フードバンクちば」の支援物資とともに、宮城県涌谷町にて農薬無散布・化学肥料不使用で米づくりをおこなっている黒澤重雄さん・伸嘉さんより「つや姫1kg」を合計180袋いただき、常総生協の供給エリアでもある千葉県柏市の私立「開智国際大学」へ届けました。

2020年春に発生した新型コロナウイルスも2年経過しましたが、今も「大学生」に大きな影響を及ぼしています。開智国際大学でもオンライン授業に切り替えたものの、学校で予定していたイベントはほとんど開催できておらず、学校と学生との交流の場が激減しています。さらに当大学では中国、ベトナム、マレーシアなど東南アジアからの留学生が多く経済的にアルバイトで生計を立てている学生が数多くいます。しかし、新型コロナウイルスの影響で飲食店等のアルバイトができず、収入源を奪われている状況です。カップ麺や飲料などのフードバンクの支援物資に加え、今回の黒澤さんのお米「つや姫1kg袋」は個々の学生が分けやすく、使いやすい上、米食になじみが深い留学生が多いのでとても助かりますと、非常に喜ばれました。

●黒澤さんの想い

新型コロナウイルスは全国各地で影響を及ぼしています。私たちもフードバンクのような取り組みにできるだけ関わっていきたくと思います。その際には「余った食べ物」という事ではなく、**生活が困窮してしまった人ほど美味しいお米を食べて元気になってもらいたい**。その一心で今回お米をお渡ししました。機会があればこうした支援を続けていきたいと思えます。



(写真：黒澤重男さん(左)、黒澤伸嘉さん)

●常総生協として

新型コロナウイルスの影響により、フードバンクのような支援団体が全国で活躍していますが、未だ支援物資が行き届かない状況です。今回訪れた開智国際大学の学生数は約550名と全国でも比較的少ないですが、留学生を多く受け入れ日本人学生と共に切磋琢磨することでグローバル社会に対応できる人材を育成しています。今後も継続的な支援をしていくと共に、地域自給大豆を目指した「みそ作り」や援農など、地域の大学とも繋がりを深めていくきっかけとなりました。

今後もフードバンクちば・いばらきと連携して活動を続けて参ります。